



## ことばの壁を超える

杉本 良男  
(すぎもと よしお)

本館民族社会研究部

# インド映画

特集

一九九八年の「ムトウ一踊るマハラジヤ(Muthu, 1995)」のヒットとともに日本でインド映画が注目を浴びてから一〇年がすぎた。そして一〇〇八年は日本印

画交流年にあたりつい。インド映画ブームはあつといいまじょしきんでしまったが、一〇〇〇年代に入るとインドはとくにその経済発展が世界の注目を集め、日本でも株式投資やインド式計算法がひそかにブームとなつてい。この間インド映画をとりまく状況は大きく変貌したが、映画は相変わらずインドの娛樂の王道である。そしてその波はさもやまななかたちで外国におよんだ。

インド映画の本格的な海外への進出は、独立後の一九五〇年代からのことである。いわゆるネルー型社会主義の理想に共鳴した社会派娯楽映画のチャンピオン、ラ

ンディ・カプールが監督・主演した「放浪者(Awara, 1951)」などが当時のソ連に輸出され、「おじらは放浪者(Awara Hoon)」のもうなヒンディー語の挿入歌も大ヒットした。現在でも、ロシアだけでなくウズベキスタン、クルグズスタンなどでもロシア映画と人気を二分している。

一九八〇年代後半には暗殺された母インディラーのあとを襲つたラジーヴ・ガンディー首相がインド文化を積極的に海外へ広めようとしたが、映画もそのとして世界に輸出された。このころ中国ではインド映画ブームが起り、日本でも一九八八年に大インド映画祭が催され多くの「PFI」ファンを獲得している。

## 欠点が魅力に

インド映画の世界への広がりは、ことばの問題があるので、まずはインド人が多く暮らしている地域に偏っている。海外在住のインド系の人ひとは数千万につき、近隣のネパール、スリランカからイギリス、アメリカ、カナダ、湾岸諸国、シンガポール、マレーシアなどへと広がって、映画も、合法非合法の手段を問わず、広く受け入れられている。

しかし、インド映画の真の不思議は、ことばのわからない地域でもかなり受け入れられているところにある。たとえば、かつてインド人移民が多くいた東アフリ

## 英国の南アジア系映画

池亀 彩  
(いけがめ あや)

エジンバラ大学社会政治学研究科研究員

### 南アジア系移民

二二〇万人といわれる南アジア系英人は、現在英國の総人口の約四パーセントを占め、非ヨーロッパ系英國人のなかで最大の「ミユニティ」を形成している。彼らの多くは、第二次世界大戦後おもに工場労働者として移住して来たパキスタン系およびバングラデシ系移民である。また東アフリカ諸国で民族主義運動の高まりで、国外退去を余儀なくされた際に、英國へ難民として移してきた人びとも多い。さまざまな過程を経て英國へ渡つてきた南アジアの人びとだが、すでに一世、二世、三世が英國人として生活している。

英國の南アジア系移民をテーマにした映画は、一九九〇年代によくあらわれた。それらは彼らの出身国の伝統的価値観と英國的価値観の衝突、世代間の衝突、多文化主義国家のなかでの自己表象などをテーマにしたものが多い。

初期の傑作「East Is East(1999)」は、一九七〇年代初頭の北イングランドに暮るすパキスタン系一家を描いたもので、伝統的な結婚を望む父親とそれに反発する子孫たちとの葛藤を「ミカル」と描いた作品である。伝統的価値を主張する親世代と、それを拒絶する一世世代との対立は、南アジア系英國人にとっては「笑い」として受け入れられるほど具体化されているが、もちろん衝突がなくなつた証ではない。

日本でも公開された「ベック汉に恋した」(Bend It Like Beckham, 2002)」は、ロンドン西部に住むシク教徒の女の子が親の反対を乗り越えてサッカーを続け、白人の恋人までつくりてしまふストーリーだ。東アフリカ出身のインド系英國人であるG・チャーダ監督は屈託なく多文化主義を強調するが、逆にその皮相さをも露呈しているように思われる。二〇〇七年の「Brick Lane」は、バングラチシユの村から一七歳で英國に移り、二〇年間東ロンドンのブリック通りで暮らす女性が徐々に自分自身を発見していく物語で



ロンドン南部郊外の南アジア系住民の多い地域

ボリウッド・スターは英國でも大人気



### ボリウッド映画市場

ある。愛がないと思っていた結婚により深い絆を発見し、長く想い続けた故郷の村に決別し、「ここ(英國)が私の故郷(ホーム)だ」と言えるまでの軌跡は、移民の生活をリアルに伝えることに成功している。しかし、この映画の元となつたM・アリの原作が、無教養で貧しい移民という誤ったイメージを流布したとしてバンクーフ・シコ・ミュニティから強い反発を受けたのも事実である。

一方、インド国外におけるボリウッドの映画(インド映画産業の中心地ムンバイの旧称ボンベイとハリウッドを組み合わせた造語)のDVD等の売り上げが印度国内での映画興行収入を上回るようになつて久しいが、英國人もこの傾向に大いに貢献している。最近のボリウッド大作はほぼ同時に英國でも公開され、興行成績で上位一〇位内につけねばならない。むしろ海外で優雅に暮らすインド人が頻繁に登場する最近のボリウッド映画(例えば「家族の四季—愛すれば遠く離れて(Kabhi Khushi Kabhie Gham, 2001)」)の方が、南アジア系英國人の血意識を満足せぬのかもしれない。



ボリウッド映画のDVDも簡単に手に入る。ロンドン

力だけでなく、ほとんどのインド人のいな西アフリカやインドネシアなどでも受け入れられている。さらに衛星放送の普及がそれに拍車をかけている。インド映画の歌つて踊つての徹底した娛樂性と、それはインド映画をさげすむときの超える原動力になっている。皮肉なことにそれは印度映画をさげすむときの常套句である。

## ボリウッドを誘う 「インド洋の貴婦人」 —モーリシャスとインド映画

杉本 星子  
(すぎもと せいこ)

京都文教大学教授

そのむかし、インド洋の大海原を帆船が行きかっていた時代、奴隸にかかる労働力として、インドから数多くの契約労働者が世界各地のプランテーションへ船出していった。そのひとつが、「インド洋の貴婦人」と謳われたモーリシャスの砂糖プランテーションであった。モーリシャスの主要生産物は、今も砂糖である。

インド・モーリシャンと総称されるインド系住民は、二〇〇七年現在、人口の六八・八パーセント（約八三万五〇〇〇人）を占める。そのうち約半数は、ボージュブリーを母語とするビハール出身の労働者の子孫であり、残りは、アーンドラ・ブ

販路をセーショルや南アフリカへ広げ  
る窓口ともなっている。モーニング・ヤス  
を舞いこなした映画「Dil Jo Bhi Kahey」  
(2005)は、アミターブ・バッチャーン  
演ずるヒンドゥー教徒の労働者の息子  
ヒローマン・カーネックのフランス系  
大資本家の娘の恋愛と家族の葛藤を描  
いた物語である。

一九九一年のインドの経済開放以来、  
モーリシャス政府はインドとの経済関係  
を強化し、インド・ヒュアやファッシンゴン、  
シヨー、映画祭などをとおして経済・文  
化交流をおこなってきた。モーリシャス  
映画協会はモーリシャスを映画のロケ地  
として使いつぶらるために、観光局や王

# インド映画と中国 —1980年代 初期のブーム

一八九六年、当時イギリスの植民地であったたインドと清朝末期の中国に、映画がはじめて持ち込まれ上映された。その後、両国の映画はそれぞれ異なる発展の軌跡をたどった。

中国では、中華人民共和国の成立後、政治的な制限を受け、一部の社会主義国家の作品をのぞき外国映画の上映が禁止されるなど、一九八〇年代の「改革開放」時代までその発展は停滞する」とになつた。

一方、インドは一九五〇年代から映画の「黄金期」に入り、現在では、年間の制作本数や観客総数が世界でもっとも多い映画大国となっている。年間の制

ディスク・ブーム

江畠「大蓬車(Caravan, 1971)」「流浪者(放浪者' Awara, 1951)」「奴里

「九〇五年 ヤバム画 演劇科舞踊  
わねねやこなや、中国にてヤベツ・バー  
ムが到来した。盤面のサトウ・ジミー [Jimmy Adjai]  
セイジン、「I Am a Disco Dancer」、  
Yaad Aa Raha Hai サウジアラビア  
曲は、わりとも人気が幅広い。激しい  
リズムが、「改革開放」の時代に入つた当  
時の中国人の人びとの高揚した心情と共に  
鳴つたと聞える。そのおかげか、ディス  
コは、あひたな流行文化のひとつに象徴  
として都会から伝統的な暮らしが残る

した。中国のトランジットも「併葉埠生戒怒(Devdas,2002)」と「医師H(ハラハラ大H, Asoka,2001)」を放映し、好評をえた。

ーの土地、Do Bigha Zamin, 1953)」などのインド映画がたびたび上映され、人気を集めた。これらの作品は中国人にとって、インド映画の代表作になつた。劇中の踊りや歌も中国の大地で急速に流行するようになった。例えば、「アバ・ラク・アバ・ラク・ア…」といふ「流浪者」のなかの歌は、学校や街のあちからちちんで流れていた。当時、憧れの電化製品だった日本製テープレコーダーをいち早く手に入れることができた数少ない大学生や、街の「万元戸(成金)」の個人経営者は、インド映画の主題曲をわざわざ大音量で流し、周囲の人びとから羨望のまなざしを集め、流行の先端を走っているという自己満足に満るところがよくあった。

「のダンスホール(迪斯科舞厅)」は、ラツ・ズボンとサンダラスといった服装の若者でいつも溢れる場所になつた。その後の約二〇年間、アメリカや日本など「先進国」の映画が、中国で多く上映され、爆発的な人気をえるようになるとともに、中国映画の質と量も急速に向上してきた。

それに対して、インド映画はストーリーが古臭く、表現手法が単純で変化に乏しいと受け取られるようになり、人気が急速に低下していった。とはいえた、審美観の多様化が進んでいる中国では、インド映画ファンもいまだ少なくない。そのため、「雅恒影視」という中國の映像会社は二〇〇三年だけで約二〇〇本のインド映画を輸入し、

三國志 卷之二

ター(ボーリング)

トロイ

ス)

**MAJESTY**  
Vendredi 30 Mai  
Mat 12.30  
DIMANCHE 1<sup>er</sup> Juin  
Soirée  
LUN 2 JUIN  
Mat 12.30  
JEUDI 5 JUIN  
  
C.I. Pictures  
**BOBBY D.**  
**BIPAGHAI**  
**CHOR**

リシャス航空とタイアップし、撮影のサポートやエキストラの手配グルーとその家族の滞在費のディスカウントといつた特典を用意して積極的に売り込んでいる。青い海と白いビーチという工キゾチツクな美貌の「インド洋の貴婦人」が微笑んで、ボリウッドの旅心を誘っているというわけである。



ポートルイスの映画館



## 映画のポスター(ポートルイス)

# インド映画

5 2008 月刊 10月号

## 天山から 愛を込めて

吉田 世津子  
(よしだ せつこ)

四国学院大学准教授



首都ビシケクにあるアラトー映画館(2008年)

少々古い話である。一九八六年、中国・新疆ウイグル自治区西端の都市カシュガルを旅行中、地元の食堂へ昼食に入った。料理を注文して待つあいだラジオかカセットが、食堂に流れていた音楽のフレーズがふと耳についた。英語の歌なのに妙にゆるく、そのわりにノリはよく、発音がはつきり聞き取れる。たつた一度聞いただけなのに記憶に残るその歌を、一〇年後、旧ソ連・クルグズスタン(キルギス)の天山山中にある村で再び偶然耳にした。長期滞在しての調査中、ホームステイ先の一家と夜遅くにテレビを見ていたときである。ようやく何の歌かわかった。『Am a Disco Dancer』、インド映画に流れる音楽だった。

中央アジアの山岳国・クルグズスタンで一九九四年からフィールドワークを続けているが、じつはわたしは現地の映画事情にあまり詳しくない。だがテレビ番組は「フィールドでみんなと一緒に観てている」のでよく知っている。特に長期滞在した一九九五、九七年、村での娯楽といえばテレビの連続ドラマか映画番組だった。アメリカ、ロシア、香港、さまざまなものだ。

「Am a Disco Dancer」、インド映画に流れる音楽だった。

## インドネシアの インド映画

小池 誠  
(こいけ まこと)

桃山学院大学教授

インドネシアでは、ハリウッド映画の人気が国产映画を凌駕している。ハリウッド映画に次ぐ人気を占める輸入映画は香港映画であるが、インド映画もインドネシア社会で無視できない存在である。一九三〇年代にはすでにインド映画が輸入され、一九五〇年代にはインド映画は一般庶民を対象とした「二級・三級」の映画館をほぼ独占するようになつた。映画製作者が国产映画に対する脅威として、輸入制限を政府に強く求めるほどの人気であった。インドネシアでインド映画が人気を獲得した理由のひとつとして映画挿入歌の魅力がよく挙げられる。

一九九〇年代になってシネコン型映画館が増えると、それまでインド映画が上映されていたような映画館の数は減って、インド映画の上映の機会は極端に少なくなつた。首都ジャカルタのバサー・スネン(月曜市)という下町にあつたりボリは、インド映画ファンには有名な映画館であったが、一九九〇年代に入つて観客が減少するようになり廃業に追い込まれている。シャールク・カーン主演の「Kuch Kuch Hota Hai」(1998)のように単発的に大ヒットして

多くの観客を集める話題作が出るが、インド映画がつねに上映される映画館は今はない。

映画館ではインド映画の影が薄くなつているが、その代わりに、ほぼ毎日どこかの放送局でインド映画が放映されている。韓国ドラマや南米制作のテレビドラマ(メロドラマ)と並んで、インド映画はインドネシアの民放テレビに欠かせないグローバルなソフツになつてきている。昼間の時間帯にインドのB級映画が放送されたり、また、ときどきブライム・タイムに大作が放送され、高い視聴率を獲得している。また、海賊版も含めヒテオCD(VCD)とDVDというかたちでインド映画は流通している。一方、活字メディアでは、「ボリウッドと女性」というインド映画専門の週刊タブロイド紙が発行されているし、「ヒンタン(スター)」という週刊テレビガイドにもボリウッドの人気スターの「シップ」が掲載されている。インド映画が好きなインドネシア人は、けつこう多いのである。

印度の映画を観たが、ハデな衣装に歌と踊り、シンプルといえはシンプルな勧善懲悪の筋書きで、インド映画は他の追随を許さない。夜中近く、電気を消した暗い部屋のなかで光を放つインド映画は、緑と茶が基本色の天山山中に極彩色の南国を映し出していた。

一九九五～九七年といえば、クルグズスタンは、ソ連崩壊独立に伴う政治経済体制の転換のまつただなかにあつた。ソ連時代の常識はすべてひっくり返り、これから自分たちは一体どうなるのか、方向感覚の喪失にみな深刻な不安を募らせていた。一九九八年、「クルグズスタンの言論」(一五九号)という新聞に、インド映画を「子ども時代の映画」であり「明るい色で描いたきれいな想いである」と評した記事が掲載されている。今から振り返るとすべてが混沌と混乱のなかにあると思えた時代だからこそインド映画はあれほどクルグズ人に愛されていましたのかもしない。



インド映画専門の  
タブロイド紙  
「ボリウッドと女性」

## 南太平洋 随一の映画産業

村田 晶子  
(むらた あきこ)

本館外研員



映画の音楽にのせて踊る女生徒

斐济の映画産業の基礎を作り、支えてきたのは、英領期にインドから労働移民として来島した人びとと、その子孫である。主要な町には歴史を感じさせる映画館があり、既にふたつのシネコンも営業している。ハリウッド映画もいち早く上映されている。インドネシアが経営するレンタル店も軒を並べ、週末とも

なると、インド映画の話題作を求めて、多くのインド系住民が訪れる。出身村を離れ、一人でインドから来島した父親について語っていたのだる(?)といふ話を聞いたことがある。移民一世の母國インドへの思いに、斐济の映画産業の出発点があるのだ。現在では、移民三世から四世が中心となり、そこはじんとはインドの地を踏んだこともない人びとである。そんな彼らは、いつの印度映画とは、祖先の地を想像する道程のひとつに他ならない。同時に映画のなかで展開される、自らが生まれ、生活を営む斐济ーとは異なるさまざまな光景に、ときに、インドの良さを垣間見、ときに、斐济の良さを再確認する道具もある。インド系住民にとっての印度映画とは、彼らと印度、そして斐济を結ぶ、じつに不思議な媒体と言えるだらう。

一方、斐济ー系住民のお気に入りは、やはりハリウッド映画だ。しかし、彼らの多くも、インド映画の一一般的な筋書きやダンスなどには妙に詳しい。

学校の催しで、インドの映画音楽にのせて女生徒の群舞を見ることがある。ある小学校で、級友から借りたインドの民族衣装を身にまとい、ぎこちなくも懸命に踊る斐济ー系生徒がいたことを覚えている。校庭中に響きわたる印度音楽にのせ、南太平洋のぬけるような青空のもと、色とりどりの衣装を身に付けた斐济ー系と印度系の女生徒によって披露される群舞は、まさに「斐济ーの印度映画」のワンシーンであった。

## インド映画